

# 島根・トップコーチ

(第100号)平成23年9月21日

【発行】 財団法人 島根県体育協会

【担当課】 競技スポーツ課

〒690-0015

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

## 【第100号発刊にあたって】

第100号は、8月の北東北総体において全国優勝の栄誉を獲得された、渡辺大介先生(安来高・男子フェンシング)、伊藤直登先生(横田高・男子ホッケー)に全国優勝の感想と、指導の重点について語っていただきました。これからの各種全国大会に臨まれる指導者の皆さんへの参考になれば幸いです。

## 【プロフィール】

S61.4.6 島根県安来市広瀬町出身  
H17.3 島根県立安来高等学校卒業  
H21.3 日本体育大学体育学部卒業  
H21.4~ 安来高等学校講師

## 【主な競技成績】

中国高等学校フェンシング選手権  
男子 団体 優勝  
男子 個人 フルレー 優勝  
サーブル 3位

全国高等学校総合体育大会  
男子 団体 第5位

## 【主な指導実績】

H21. 全国高等学校総合体育大会  
男子 団体 第5位  
H23 中国高等学校フェンシング選手権  
男子 団体 優勝  
H23 全国高等学校総合体育大会  
男子 団体 優勝

## 『北東北インターハイを終えて』

島根県立安来高等学校 フェンシング部 男子  
監督 渡辺 大介

2011年夏、青森県むつ市で開催された北東北インターハイにおいて28年ぶりに男子団体戦優勝という結果を残す事ができました。この成果は日頃から安来高校フェンシング部を支えて

いただいている保護者の皆様をはじめ、学校関係者、島根県フェンシング協会、安来高校フェンシング部OB、OG、様々な方々の気持ちが一つになり成し得た結果だと思っております。本当にありがとうございました。

この度このトップコーチの紙面をおかりしまして今回のインターハイ優勝までの軌跡と私自身の感想を書かせていただきたいと思います。

『はじめに』

この度の震災によりたくさんの方が被災され、フェンシング関係者の方々も東北地方を中心に大きな被害を受けられた中、今回の北東北インターハイを運営していただきました役員の方々、そして関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

『バスで青森へ』

今回の北東北インターハイフェンシング競技は青森県むつ市で開催されました。本来であれば移動時間の短い航空機で移動できれば一番良かったのですが、競技の特性上荷物がとても多く乗換や現地での移動も考え貸切バスで移動をしました。途中山形県での練習試合大会に参加してそのまま青森県入りするという大遠征となりました。ですがその道中で生徒たちと色々な話をしながらリラックスして現地に入れたことは良かったと思っています。9泊10日という長い間、同行して下さった運転手の方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

『山形での練習試合大会』

インターハイ直前まで山形県で九州や四国、関東、東北などのインターハイ出場チームと近隣高校が参加しての練習試合大会に参加させていただきました。この大会に参加し直前にモチベーションを高められたことも選手たちにとってとてもよかったと思っています。

『経験したことのない試合会場』

青森県むつ市の試合会場に到着しますと初めに、「こんな所で試合するの?」という感想を持ちました。そこは天井の高さは体育館の数倍、地面は天然芝で覆われたドームが試合会場となっていました。私自身フェンシングの大会は体育館のなかでしかやった事がなく、選手も戸惑い

を隠せない様子でしたが会場で練習していくうちにだんだんと慣れ、その日の帰り支度をしているところには「こっちのほう解放感があって動きやすい」という声も聞こえてくるほどでした。

『なにがあってもいつも通り』

大会最後の競技、いよいよ学校対抗戦を迎えました。まず安来高校女子が地元青森県の田名部高校と対戦しました。地元の大応援もあり厳しい戦いの中善戦しましたが敗れてしまいました。しかし今大会で一番大きな声援と心のこもったサポートをこの後の男子学校対抗戦で発揮してくれ、今回の優勝に欠かせないまさしく日本一の応援でサポートしてくれました。

そして男子学校対抗戦、私は今大会生徒たちにこの言葉をかけ続けました。「いつも通り行こう！」対戦相手がどんな選手かは関係ない、自分たちが今までやってきたことを出し切ることに集中してほしい。という気持ちからこの言葉を何回も何回もかけ続けました。今回の安高男子メンバーはこれまでの各大会でも対戦相手が全国的に有名な選手であったり、日本代表選手を相手にすると委縮してしまうことがよくありました。私は勝ってほしいという気持ちもありましたがそれ以上に自分達の力を出し切ってほしいと強く思っていました。

1回戦、札幌光星（北海道）2回戦、青森北今別（青森、開催県）3回戦、北陸（福井）に勝ち、続く準々決勝は昨年度優勝している愛工大名電（愛知）緊迫した試合のなか長島、佐々木を中心にポイントを重ね5-2でなんとか逃げ切りベスト4に進出しました。続く準決勝は中国ブロックで何度も対戦している岩国工業（山口）やりにくさは多少ありましたがやはりここでも「いつも通り行こう」と生徒たちと気合を入れ直しました。試合は安高のポイントが次々に決まりチームカウント4-0とあと一勝で勝利というところまで来てそこから反撃され4連敗。最後に回ってきたのはここまで負け越している安部。決めては決められるシーソーゲームとなりチームカウント4-4、個人スコア4-4（5点先取で勝ち）の1本取った方が勝ちという場面。会場中がこの1本どちらが取るのかという緊迫した試合となり残り数秒のところまで先に仕掛けたのは安部でした。過去の試合では下がることしかできなかった彼が先に攻撃を仕掛け見事にポイントを取り決勝進出を決めました。「よっしっ！」と思う反面チームカウント4-0から追いつかれたことを「誰かが4-0にな

った時点でもう勝ったと思っていたんじゃないか」と自分達の意識をもう一度締め直しました。そして最後に「次は決勝！この舞台で試合が出来るのは全国で2チームだけ！ここで戦えることを楽しんでいつも通り行こう」と選手たちを送り出しました。

決勝戦の相手は昨年の沖縄インターハイで4-5というスコアで負けている富山西（富山）、攻守ともにバランスの取れている強豪校で一昨年度の優勝校でもあるチームです。試合は一進一退の接戦で4-4となり迎えた最終戦、ここで前の試合決勝進出を決めた安部が再び登場しました。昨年の沖縄インターハイも全く同じ場面で安部に回ってきて何も出来ずに負けていただけにこのときばかりは彼の肩に力が入っているのがわかりました。しかしベンチの後ろから聞こえてくる安来フェンシング部員の声援、保護者の方々の声援、そしてチームメイトからの「お前ならできる！！」の声を胸に冷静さを取り戻し個人スコア5-3で勝利し優勝することが出来ました。

今回の全国制覇は決して誰か一人の力で達成されたものでもなく、また誰が欠けても成し得なかった事です。「チーム島根」を合言葉に努力を続けてきた選手たち、サポートして下さった保護者の方々やフェンシング協会の方々、様々な人の思いが一つとなり大きなパワーを生んだのだと確信しております。

今回のインターハイにおいて私は「いつも通り」という言葉を何十回と言いました。どんな対戦相手でも、どんな状況でも自分たちがやってきたことを信じて戦ってほしいという気持ちからこの言葉を選手に言い続けました。この大舞台で「いつもどおり」力を発揮した選手たち、日本一の応援でサポートしてくれた女子部員、そして選手たちの「いつも」を支えて下さった保護者の方々、すべての方に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

『終わりに』

この度のインターハイ優勝という瞬間に立ち会わせていただき今までに感じた事のない感動とこれからもっと上を目指し頑張りたいとさらなる意欲を持たせていただいたと同時に、様々な方に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ未熟者ですがこれからもフェンシングができることに感謝し日々努力していきたいと思えます。このような機会をいただきありがとうございました。

## 【プロフィール】

平成18年3月 横田高等学校卒業  
平成22年3月 天理大学卒業  
平成22年4月 横田高等学校講師

## 【主な競技成績】

平成16年 全国選抜大会 優勝  
中国04総体 準優勝  
国体 優勝  
平成18年 全日本大学選手 優勝  
平成19年 大学王座・全日本大学選手権・  
全日本選手権 優勝  
平成20年 大学王座・全日本大学選手権・  
国体・日本リーグ 優勝

## 【主な指導実績】

平成22年 沖縄総体 ベスト8

## 『全国制覇に向けて』

島根県立横田高等学校 ホッケー部 男子  
監督 伊藤 直登

### 「チームづくり」

昨年10月に国体が終わり新チームになってからは、「走り負けないホッケー」「スピードある試合展開」を目標にチームづくりに取り組みました。練習の中で特に選手に意識させたのは、考えながらプレイをすることです。攻撃パターンや守備の仕方など、ある程度の形はありますが、実際の試合で相手がどのように動くのかなどは試合をしてみないと分かりません。また、監督・コーチの指示をすべての選手に伝えることも難しいです。その中で試合の流れを読み、臨機応変に対応出来るように、常に練習中から試合をイメージさせ、次のプレイを予測してパスを出したり、リードをしたりということを意識させ練習に取り組みました。また、コート全体をみられるよう視野を広くもち、相手のポジショニングやスペースを把握するような練習も取り入れました。最初は慣れないことが多く、上手くかみ合わずパスがつかなくなったり、スピードを途中で止めてしまったりと生徒の中にはストレスが溜まることもありました。辛抱強く続けていくうちに徐々にお互いのタイミングが合うようになり、練習や試合の中で素早いパス回しからの攻撃が組み立てることが出来るようになっていきました。また、練習中にうまくいかないことがあれば、自分たちで積極的に話し合いをしてその場で解決させ、次の練習

に活かすという光景が多くなりました。

### 「北東北インターハイ」

今年は選抜大会が中止になり、インターハイが新チームになってから最初に臨む全国大会でした。昨年の沖縄インターハイでは、準々決勝で破れベスト8という結果に終わりました。その原因の一つに、最後まで走り続ける体力・負けたくない気持ちというのが足りなかったと私自身深く感じました。今年のチームは「向上心を持って練習に取り組む」・「どの試合でも勝ちにこだわる」の二つを選手たち自身で考え目標にしていました。練習試合であっても最後まで集中力を切らさず、勝つことに執着をして緊張感を持って臨むことで、本番の試合を意識させることが生徒たちを本気にさせ、練習も質の高いものになっていきました。

成年のチームや他県のチームと練習試合をした後も、まずは自分たちでミーティングをし、お互い確認をさせ合うという場を多くつくりました。そこでは自分の思っていることを周囲に伝えたり、他の選手が持っている意見を聞き吸収したりと、コミュニケーションをとる場としてチームの共通理解をするためにはよかったです。選手の間で意見が合わなかったり、思うようにならなかったりということもたくさんありましたが、インターハイ前にはチーム全体としてしっかりまとまって「全国制覇」という一つの大きな目標に向かって団結することができました。

北東北インターハイでは、初戦から決勝まであわせて26得点0失点で優勝することが出来ました。試合では苦しい場面もありましたが、ひとりひとりが最後まで走り抜き、練習してきたものがすべて出せたことがこの結果につながったと思います。これからは他のチームから追われる立場となり、今まで以上に気持ちを引き締め、次の大会に臨みたいと思います。

### 「最後に」

私自身が指導上大切にしていることは、分からないことや問題が出てきたときに、すぐに聞くのではなく、まずは自分で考えさすということをしていきます。分からないことを自分で考えることで、試合中でもその場で起こる出来事に対して瞬時に対応出来ると思います。このことは常に練習中から生徒に意識をさせるようにしています。

まだ指導者として2年目でわからない事ばかりで多くの壁に突き当たることもあると思いますが、これからも生徒と一緒に、私自身も成長していけるよう頑張っていきたいと思います。

### 島根のスポーツ振興を願いつづけた人、(故)岡田善富氏について

機関紙「島根トップコーチ」も創刊から100号を数え、これまで執筆いただいた往年の名指導者や活躍中の指導者にいたる多くの方々への指導者魂(たましい)に触れることができた。そして、この魂に心動かされた若い指導者が全国の舞台で活躍する姿を見る時、「島根トップコーチ」創刊の趣旨に光があたったことを実感する。くしくも記念すべき100号を飾ったのは全国高校総体で日本一に輝いた二人の若い指導者であったことは本当に嬉しい。

この「島根トップコーチ」の創刊は平成15年に、島根トップコーチ養成事業の一環として始まったものだが、この事業は島根県体育協会の育ての親とも言われる(故)岡田善富氏のご遺志による高額の寄付を基金として生まれたものである。

記念すべき100号にあたり、(故)岡田善富氏の人となりについて述べたい。

岡田氏は現在の島根電工を築きあげられた財界のリーダーとしても有名だが、松江中学・大学時代はバレーボールの名選手として活躍された。特に松江中学OBで結成された「紅陵クラブ」では全日本選手権で日鉄八幡(新日鉄)を破り、石川国体では準優勝に輝くなど、昭和20年代から30年代にかけて、戦後島根バレーの全盛期へのきっかけをつくった人である。

また昭和45年島根県が国体を誘致することを県議会で決定するや、県体育協会の再建を依頼され、初代の理事長に就任。体育協会の財団法人化や組織の強化に尽力し、昭和57年念願の「くにびき国体」を総合優勝の大成功に導き、その後も会長(県知事)を補佐する副会長として、また島根県スポーツ振興審議会会長として、島根県スポーツ界の重鎮の役割を果たしてこられた。

理事長就任当時のエピソードが島根体育史に載っていたので紹介すると、岡田理事長は、会長である田部知事に県体協の実情を訴え「体協募金」を行って返済できるまでの間、県から1億円程度の無利子貸付を懇請し、承諾を得たのである。この時の感動を岡田理事長は『私は一大決心をして田部知事に単身面会し、募金して返済できるまで、県から1億円を無利子で貸していただきたいと直訴した。知事は私の思いつめた話を黙って聞いておられたが、一言「承知しました。しっかりやってください」という言葉を頂戴した時の嬉しさは忘れることができない』と語っておられる。・・・如何に島根のスポーツ振興に情熱を注がれたかを知ることができる。

おわりに、時代を担う若い指導者が育ちつつあることを、天国の(故)岡田善富様にご報告し、謹んで感謝の意を申し上げます。

元競技力向上統括アドバイザー  
荊尾 俊